

日本の近代音楽の基礎を作った

しも おさ かん いち
下 總 皖 一



—座右の銘—

高く飛ぶ鳥は

地に伏すこと

長し

作曲家・音楽理論家・音楽教育家として
生涯を音楽に捧げた偉人



下總皖一年譜

- 明治31年(1898年) ● 3月31日、埼玉県原道村大字砂原75(現・加須市)に父吉之丞、母ふさの二男として生まれる。
- 明治45年(1912年) 14歳 ● 3月、栗橋尋常高等小学校を卒業
● 4月、埼玉県師範学校に入学
- 大正6年(1917年) 19歳 ● 3月、埼玉師範学校本科一部を卒業(現・埼玉大学)
● 4月、東京音楽学校師範科に入学(現・東京藝術大学)
- 大正9年(1920年) 22歳 ● 3月、東京音楽学校を首席で卒業。記念奨学賞を受ける
● 4月、長岡女子師範学校に赴任。
- 大正10年(1921年) 23歳 ● 1月、飯尾千代子と結婚。
● 9月、秋田県立秋田高等女学校へ転任。秋田県師範学校附属小学校でも教鞭をとる。この地で新居を構えた。
- 大正13年(1924年) 26歳 ● 9月、栃木師範学校に転任。千代子夫人が病気がちのため伸枝と改名。下總も覚三改め、皖一を名乗る。本格的に作曲に取り組む。
- 昭和2年(1927年) 29歳 ● 4月、上京。居住を牛込喜久井町に移す。

- 昭和7年(1932年) 34歳 ● 3月21日、文部省在外研究員として、作曲法研究のため渡独。ベルリンの国立ホッホシューレに入学。パウル・ヒンデミット教授に師事。
- 昭和9年(1934年) 36歳 ● 9月3日、滞独2年の留学生生活を終えて神戸港に帰着。東京音楽学校教師となる。12月、教授となる。
- 昭和10年(1935年) 37歳 ● 曲・三味線協奏曲、著・和声学
- 昭和13年(1938年) 40歳 ● 曲・箏独奏のためのソナタ、著・作曲法
- 昭和15年(1940年) 42歳 ● 文部省教科書編集委員となる。
- 昭和16年(1941年) 43歳 ● 9月、品川区上大崎に転居
- 昭和17年(1942年) 44歳 ● 3月、東京音楽学校教授となる。
- 昭和19年(1944年) 46歳 ● 著・日本音階の話
- 昭和25年(1950年) 52歳 ● 下總皖一混声合唱曲集10巻の出版始まる。
- 昭和30年(1955年) 57歳 ● 11月、文部省教科調査委員となる。
- 昭和31年(1956年) 58歳 ● 10月、東京芸術大学音楽学部長となる。
- 昭和33年(1958年) 60歳 ● 1月、東京国立文化財研究所芸能部長となる。11月、文部省視学委員となる。
- 昭和34年(1959年) 61歳 ● 6月1日、東京芸術大学音楽学部長を辞任。教授として逝去まで同大学に在籍
- 昭和37年(1962年) 64歳 ● 7月8日、永眠

下總皖一誕生

下總皖一は、明治31年3月31日、現在の加須市（旧大利根町）に、父吉之丞、母ふさの二男として生まれました。

本名を覚三といい、幼いころは豊かな自然の恵みと、父親の文学好きの血筋を受け継いで、多感な少年時代を田園地帯で過ごしました。

また、父親が校長先生だった尋常高等小学校に入学しました。この時、学校にあったベビーオルガンを弾き大変喜びました。

これが皖一と音楽との出会いです。



努力家の下總皖一

東京音楽学校に入学した下總皖一は、あまり目立たない学生でしたが、じっくり丁寧にねばり強く勉強を続け、首席で卒業しました。同時に記念奨学賞も受賞しました。

昭和7年、文部省在外研究員としてドイツに渡り、ドイツの優秀な人でも入学が困難な国立高等音楽学校ホッホシューレに入学し、世界的に有名なパウル・ヒンデミット教授に師事しました。

ドイツでは新しい作曲の知識をどんどん吸収する一方、「日本人の自分にしか表現できない作曲」をしたいとの思いを徐々に強くしました。



音楽理論家・音楽教育家
としての下總皖一

昭和9年(1934年)ドイツ留学から帰って、翌10年に著した理論書「和声学」は、ドイツでの恩師パウル・ヒンデミットから激賞されました。その後次々と理論書を著し、「作曲法」「日本音階の話」「作曲法入門」「楽典」「音楽理論」「対位法」など日本の近代音楽の基礎を作ったとされています。

「和声学の神様」とまで言われました。

また、昭和31年(1956年)には、東京芸術大学の学部長になり、日本の音楽教育の頂点に立ちました。



多くの校歌を作曲

下總皖一が作曲した校歌は全国の40都道府県で歌われ今も引き継がれています。なお、下總皖一が作曲した校歌は500曲以上とされています。

なお、埼玉県で作曲した校歌は出身校の原道小学校(旧原道尋常小学校)や埼玉大学教育学部附属小学校など90曲にも上ります。

※別のパネルに下總皖一埼玉県校歌マップがあります。



愛用したピアノ

みかん好きで有名

旅行の時は「作曲ノート」と「みかん」を決して忘れなかったそうです。

時には、みかんを20個も持っていき、みんなにすすめ自分でもとてもおいしそうに食べました。

芸大の学生がみかん狩りの旅行を企画した時は、喜んで参加したそうです。

ガッチャン！

とても几帳面な生活ぶりでした。時間には厳しく、遅刻は許さなかったそうです。

芸大の教授時代に学生たちから「ガッチャン」というあだ名をつけられています。

あだ名の由来は、授業のベルが鳴ると文字通りドアを「ガッチャン！」と閉めたからだったかもしれませんね。

農業への深い思い…

日記には天候と、野菜の栽培・収穫の記録が事細かに書いてあります。

カボチャ・エンドー豆・ソラ豆・白菜・ホウレン草・カラシ菜・タカ菜・ソバ・玉ねぎ・カブなど、農家顔負けです。

手間のかかる農作業が、芸大の仕事が忙しい時期に盛んに行われていることに驚きます。



埼玉県ゆかりの童謡

♪みかんの花咲く丘

みかんの花が咲いている
思い出の道 丘の道
はるかに見える 青い海
お船がとぶく かすんでる

加藤晋吾(大正3年~平成12年)が
深谷市に疎開中、故郷の情景を思い出して
作ったのが「みかんの花咲く丘」です。



♪たなばたさま

ささのはさらさら
のきばにゆれる
お星さまさらさら
さんざんすなご

加須市(旧大利根町)生まれの
下郷成一(明治31年~昭和37年)
は、「たなばたさま」「かくれんぼ」
など数多くの童謡を作曲しました。

♪とおりゃんせ

とおりゃんせ とおりゃんせ
ここはどこ細道じゃ
天神さまの細道じゃ
ちょっととおしてくだしゃんせ...



歌に出てくる天神さまは、川越市の
三河野神社だと言われています。

♪靴が鳴る

お手つないで 野道を行けば
みんな可愛い 小鳥になって
喉をうたえば 靴が鳴る
晴れたみ空に 靴が鳴る



和光市に住んでいた清水かつら
(明治31年~昭和26年)は、武蔵野
の雑木林をイメージして「靴が鳴る」
「叱られて」を作曲したと言われて
います。

♪家山子

山田の中の一本人のかかし
天気の良いのみにの登つて...

さいたま市に生まれた武笠三
(明治4年~昭和4年)は、見沼
田んぼをイメージして「家山子」
を作曲したと言われています。